

被災地域における「故郷」の語りの変遷

—南三陸町での聞き取りをもとに—

宮 前 良 平

要旨

本研究は、東日本大震災による被災地、南三陸町における「故郷」観の変遷について、インタビュー調査を通じて考察した。震災後被災地の多くでは、多くの住民が地域外へ移住し、コミュニティの崩壊が進んだとの指摘がある一方、地元に残った住民や新たに移り住んだ移住者との間で新たなコミュニティ形成も見られる。本研究では震災を経験した人びとにとっての「故郷」とはなにか、故郷観の変容はどのようにして生じるかに焦点を当て、南三陸町におけるコミュニティ規範の変容過程を明らかにすることを目的とし、宮城県南三陸町をフィールドとしてインタビュー調査を行った。インタビュー協力者は、町で生まれ育った人、Uターン者、Iターン者などさまざまな進路をとった人を選定した。得られた語りはKJ法を用いて分析した。分析の結果、「故郷」観は主に意思以前の構成された共同体としてみなされていることが分かった。これは、アイデンティティの一部としての愛着だけでなく、逃れがたい宿命のような感覚としても語られた。しかしながら、南三陸町のコミュニティは震災を契機に大きく変容し、共同体的な関係が交響体的な〈故郷〉へと移行する過程が明らかになった。それは、選択によって事後的に運命を創出すること、故郷を選び直すことによって成される。本研究は、震災後の「故郷」観の変化を明らかにし、被災地のみならず他の地域にも適用可能な示唆を提供している。

キーワード：東日本大震災、コミュニティ、〈故郷〉、交響体、関係人口

1 はじめに

2011年3月11日に発災した東日本大震災は、東北沿岸部を中心に大きな被害をもたらした。津波による甚大な被害は、高台への居住地の移転をとまなう地域コミュニティの再編を促した。多くの場合、被災者は被災直後から避難所、統合先の避難所、仮設住宅、再建した自宅や高台の公営団地などさまざまなコミュニティを渡り歩き、その都度、新たなコミュニティづくりを強いられることとなった。

また、被災地域外への移住の大幅な増加も看過できるものではない。本稿で対象とする宮城県の南三陸町では、2011年2月時点で17,666人の人口であったが、およそ13年後の2024年3月末には11,655人

と約3分の2にまで減少している。特に若年層での人口流出が顕著であり、2010年国勢調査時の10～14歳人口は887人であったが、2020年国勢調査では20～24歳人口は400人と半数以上減少している。南三陸町内には大学がないこともあり、地域外で就学をした若者が都市部で就職や家庭を築くなどして、地元に戻る選択肢を取らなくなっていることが影響していると見られる。

このような地域コミュニティの壊滅的な変容によって、コミュニティ全体がトラウマを追うことがアメリカなどで報告されている。このような現象は特に「集合的トラウマ」(エリクソン, 1976=2021)として知られる。集合的トラウマとは、災害が一人ひとりにトラウマを与えるとみなす個別的

トラウマの考え方とはことなり、災害によって、コミュニティが壊滅的なダメージを受けることで、コミュニティに根づく人と人との共同性・つながり（communality）が喪失すると考える見方である。また、その後、復興過程で共同性・つながり不在のコミュニティが作られることで集合的トラウマは深刻化すると指摘される。つまり、震災後の歯抜けになったコミュニティは、単なる人口減少という量的な問題ではなく、集合的トラウマになぞらえられる「ふるさとの喪失」に直面しているのである（大門・宮前・高原, 2020）。

本稿で特に着目する若者の地域移動を定式化したものが「ローカル・トラック」（吉川, 2019）である。ローカル・トラックとは「それぞれの地方の出身者が、アカデミックな進路選択とは別次元のものとして、自らの地域移動について選択していく進路の流れ」（吉川 2019:223）として定義される。ここで注目したいのは、「トラック」（進路・軌道）という語感である。つまり、一度進路選択の流れに乗ってしまうとそこから降りることは難しい。例えば、南三陸町から都市部の大学に通うという選択をひとたび取ると、都市部で就職するという「トラック」に半ば自動的に乗せられてしまい、地元へ帰るという「トラック」に乗ることが相対的に困難になる。言い換えれば、（被災地に限らないが）被災地の若者たちの多くは、自らの意思で地元から離れる選択を取るといよりは、気づかぬうちに地元から離れる「トラック」に乗せられているのである。

このような人口減少著しい中で、南三陸に居住する若者たちは、どのように地元のことを考えているのだろうか。東日本大震災後の南三陸町に居住する若者（地元周遊、Uターン、Iターン）へのインタビュー調査（鈴木ほか, 2023）によると、震災前は濃密で煩わしくもあった人間関係を基盤としたコミュニティに、震災を契機にボランティアなどの外部者との交流や、地域内の多様な人たちとの交流が促進されたと若者たちは捉えていることが明らかになった。また、「南三陸」を単なる出身地ではなく、特別な愛着を有する土地として捉え返す語りも見られた。震災による環境の変化によって、コミュニティ

にはポジティブな変化も起きていることがうかがえる。

以上をまとめよう。東日本大震災という巨大災害によって、否が応でも被災コミュニティは変化を強いられた。そのネガティブな結果として、「ふるさとの喪失」に見られるような集合的トラウマが起こり、その一方で、ポジティブな結果として共同体規範の弱化によるコミュニティへの愛着の高まりも見られることが先行研究から明らかになった。このような先行研究を踏まえて、本研究では震災を経験した人びとにとっての「故郷」とはなにか、故郷観の変容はどのようにして生じるかに焦点を当て、南三陸町におけるコミュニティ規範の変容過程を明らかにすることを目的とする。

2 方法

2.1 インタビュー

本研究では、宮城県南三陸町をフィールドとしてインタビュー調査を行った。インタビュー協力者はすべて南三陸町に居住する人びとであるが、町で生まれ育った人、Uターン者、Iターン（移住）者などさまざまな進路をとった人を選定した（表1）。調査期間は2020年9月、2021年12月、2022年8月3回に分けて行った。それぞれ1時間～1時間半ほどであり、調査協力者のライフコースを伺いながら、その都度質問を重ねるという半構造化インタビューであった。なお、本研究の実施にあたっては共同研究者である鈴木勇の所属する大学の研究倫理審査委員会において承認を得た（承認番号 大2020-29, 大2022-31）。また、本研究で使用するインタビューデータは、既刊研究（鈴木ほか, 2023）と一部重なっている。

2.2 分析方法

分析方法にはKJ法を用いた。KJ法とはインタビュー内容を圧縮しグループ化することで統合を図る手法である（川喜田, 2017）。具体的には、文字起こした語りを切片化し、内容に即した名前をつけ、それらを似たような語りごとにグループ化するという

表 1 インタビュー協力者

仮名	性別	年代	移動形態	最終学歴	現職
L1	男性	10代	ローカル（地元定住）	高卒	地元就職
L2	男性	10代	ローカル（地元定住）	高校生	
L3	男性	10代	ローカル（地元定住）	高卒	地元就職
L4	女性	20代	ローカル（地元定住）	高卒	地元就職
L5	女性	20代	ローカル（地元定住）	高卒	地元就職
L6	女性	10代	ローカル（地元定住）	高校生	
L7	男性	10代	ローカル（地元定住）	高校生	
L8	男性	30代	ローカル（周流）	専門卒（仙台）	自営業
L9	男性	30代	ローカル（周流）	専門卒（仙台）	自営業
L10	男性	20代	ローカル（周流）	大卒（仙台）	地元就職
L11	男性	40代	ローカル（周流）	大卒（仙台）	地方議員
L12	男性	20代	ローカル（周流）	大卒（仙台）	団体職員
U1	男性	30代	Uターン	大学院卒（山形）	自営業
U2	男性	40代	Uターン	大卒（山形）	団体職員
U3	男性	30代	Uターン	専門卒（東京）	団体職員
U4	男性	30代	Uターン	専門卒（東京）	自営業
U5	女性	20代	Uターン	大卒（山形）	無職

仮名	性別	年代	移動形態	最終学歴	現職
I1	男性	30代	Iターン	中卒（大阪）	自営業
I2	男性	30代	Iターン	大卒（東京）	団体職員
I3	男性	40代	Iターン	大学（東京）	自営業
I4	女性	30代	Iターン	大卒	団体職員
I5	女性	20代	Iターン	大卒（東京）	団体職員
I6	女性	30代	Iターン	大学院卒（東京）	自営業
O1	男性	60代	Uターン	専門卒（東京）	自営業
O2	男性	70代	ローカル	地元高卒	自営業
O3（L2保護者）	男性	50代	Uターン	高卒	役場職員
O4	男性	40代	NA	高卒	役場職員
O5	男性	60代	Iターン	大卒（東京）	自営業
O6	男性	70代	Iターン	専門卒（東京）	自営業
O7（L6保護者）	男性	50代	Uターン	専門卒（仙台）	自営業
O8（L7保護者）	男性	50代	ローカル	高卒	自営業
O9	女性	30代	NA	NA	団体職員
O10	女性	40代	NA	NA	団体職員

う一連のプロセスをとった。たとえば、「ワークとライフはもうごちゃ混ぜです、割と。ほんとに、昨日一緒に仕事してた人は、今日は一緒に釣りにしたりとか、何かそういう感じっすね」という語りには「ワークとライフがごちゃまぜ」と名付け、「地域って、何かすごいスローライフ的なイメージあるかと思うんですけど、全然違うじゃないですか。めちゃ忙しいしみたいな」には「ふるさとへの幻想」と名付けた。

その結果、分析で用いるものとして163の切片化された語りが抽出され、大きくまとめ4つのグループ「共同体」「連合体」「集列体」「交響体」（理論的な基盤については後述）が構成された。語りの後に付記されるアルファベットと数字はインタビュー協力者につけられた番号を示している。以下の章ではそれぞれのグループについて詳しく見ていく。

なお、分析は筆頭筆者1名で行った。質的分析においてはときおり、複数人で分析を行うことによって理論的妥当性を担保しようとする向きがある。しかしながら、複数人で分析を行うことがすなわち妥当性の担保にはなりえない。むしろ、質的分析において重要なのは、理論的実践的有用性であり（辻本, 2024）、それは分析者の数で決まるものではなく、ましてや切片化されたコードの多さで決まるわけではなく、分析結果を読んだ読者一人ひとりによって判断されることである。

3 結果と考察

本章ではインタビュー中の得られた「故郷観」に着目して分類を行う。

3.1 アイデンティティの一部としての故郷

まず、よく聞かれたのがアイデンティティの一部として故郷を感じているという語りである。より細かくは「愛着」「残ることが最初から決まっていた」「バトンを渡す」の3つに分けられる。

故郷への愛着を示す語りは具体的には以下のようなものである。

ずっと地元が、何か不思議と愛着があって。逆にいうと、東京とかに対する憧れってなかったかもしんです。変にそこまで他の地域とか、都市部に行って住もうみたいな感覚はあまりなく、それがいいことだとか、それがカッコいいとかは一切なくて、それよりも地元に戻ってきたいなのほうが。(L12)

海が好きなので離れたくないっていうのと、東京とかに行ったら結構、海すぐ見れないじゃないですか。それがあって、あんまり地元から離れられないのはあります。(L5)

ここで言う愛着とは、地元の良さをいくつも挙げ

てそれを眺めたときに得られる合理的な思考の結果のようなものではない。そうではなく、はじめから地元が好きであったというような、ア priori に地元が好きである状態である。地元への愛着が何よりも先にあって、その理由を探すように言葉を紡いでいるようにも聞こえる。そして、それらの言葉は、地元の好きなところを一つ一つ挙げるというよりは、都会との差異によって特徴づけられるようである。つまり、故郷にあって都会にないものを挙げることで、ようやく輪郭づけられる種類の愛着である。

このように愛着が先にあって理由が後からつけられるような語りは、故郷を離れるかどうかの選択の際にも見られる。

（地元に残ることは）もともと震災の前から決めてたんで。(L4)

基本的にそこまで県外に出たいと思わないタイプだったんですね。何て言ったらいいのかな。家から通える距離で探そうかなって、ずっと思ってたんで。(L4)

これらの語りは、地元に残るという選択が先にあった——言い換えれば、それ以外の選択肢がそもそも本人の中に無かったことを示唆する。

そして、これらの故郷観は世代を超えて継承されるわけだが、こちらも継承するという目的が先にあって、それ以外の選択肢がそもそも用意されていないような語りが見られた。

まずは結婚して親に孫見せたいなっていうのは。結構やっぱり言われるんで、僕の中での第一目標はそこですかね。(L8)

父方のほうが、たしかずっと志津川だったと思います。(L1)

もうお父さんの後継ぎを本当頑張りたいって思っています。(L6)

だから僕も、正直戻ってきた時点で僕の目標というのはもう、家を継ぐことがもう、継ぐっていうか要は、僕が継いで次にバトンを渡すっていうことが最終ミッションであり、それなんです

よ。その継ぐための条件ももちろん、環境を整えるっていうのも継ぐの中の、バトンを渡すの中の内だと思ってるんですけど。(U1)

「バトンを渡す」という語りが特徴的である。自分がバトンを受け取るのみならず、そのバトンをさらに次の世代に渡すことが最終ミッションとして語られる。それは故郷が好きだからというレベルを超えて、そうであることが無条件に正しいことであるかのようにさえ感じられる。その過去から連綿と続くバトンリレーの一員になることが重要なのである。

これらの語り（「愛着」「残ることが最初から決まっていた」「バトンを渡す」）は、故郷が他にもいくつもある居住地の一つというような都市的な世界観から生まれたものではない。むしろ故郷に暮らすということが、自分の一部であるような、強い規範性を帯びていると考えられる。そのため、これらの語りをグループ化し【アイデンティティの一部としての故郷】と名付けることとする。

3.2 くびきとしての故郷

その一方で、故郷から離れるという選択肢がア priori に除外されている状況は、居住地選択の自由を制限する。それに関連する語り（「故郷を出られなかった」「宿命・呪い」「故郷からの逃走」）を紹介する。

故郷についての語りの中で、故郷に残ったという語りのいわば裏面として語られるのが、故郷を出られなかったという語りである。

僕が出れなかった、出れなかったっていうか出なかった分、もっと広い視野で見れるんじゃないかなって思ったりとか。今までに町にないアイデアとか出てくるかもしれないので。(L8)

故郷を出られなかったという、否定形で語られる語りは、故郷の衰退への危機感とともに語られる。故郷の外に出ることは、他なる規範を身につけることにも通じ、その規範を故郷に持ち込むことで地域の発展にもつながる。しかしながら、そのような新たな規範が持ち込まれないままだと故郷は前時代的

な場所となり、時代に取り残される可能性がある。

他地域に居住していた経験を持つUターン者であっても、故郷から出られないことへの語りが見られる。

小さい頃に、もしかしたら全部準備されてた運命というものがあるのであれば、神様が仕向けたとするのであれば、全部が全部、その一回、別なものを研究したりとかっていう道を歩むっていうのも、この戻ってくるためのものになっているのかなって思うぐらい、なんかこう、正直すんなり来れちゃったんですね。(U1)

すごい。それは、家をつぶすっていうのが分かるような気が(…)だから、僕は呪いだと思ってるんです。(U1)

故郷を一度出ることさえも、最初から決まっていたような感覚は、語りの中に見られる「運命」という言葉、あるいは「宿命」とさえも言うような、自分の選択が及ばない外的な力を感じさせる。この宿命に逆らうと、自分のみならず家族や共同体全体にネガティブな効果を及ぼすと認識されるようで、「呪い」という語りも見られた。

宿命から逃走しようともがくような語りも見られた。

「何か戻らない理由があればいいな」みたいな。
「この田舎に帰ってこなくていいような何かないかな?」くらいの感覚 (U2)

故郷から離れているときでさえ、デフォルトの選択肢が故郷に帰るということであった。帰らないという選択を取るためには、なにか積極的な理由が必要である。いわば、故郷に帰らないという言葉では、この状況を説明するにはいささか軽く、故郷からの逃走を図ろうとしていたと表現するほうが近いようにさえ思われる。

これらの語り(「故郷を出られなかった」「宿命・呪い」「故郷からの逃走」)は、故郷から外に出ることがそもそも想定されていないことを示唆する語

りであり、【くびきとしての故郷】と名付けることとする。

3.3 濃密なコミュニティ

故郷の特徴を表す際に人の温かさが語られる。この節では、そういったコミュニティの結びつきに関する語り(「人を疑わない」「おすそ分け」「安心感」)を紹介する。

生まれ育ったこの町が唯一教えなかったことが、
(…)人を疑うことだけだったですね。結局鍵なんかかけない。(L9)

コミュニティが濃密であれば、お互いのことをよく分かっているのだから、家に鍵をかける必要はほとんどないのかもしれない。お互いにお互いを気にかけてあうようなコミュニティにおいて、人を疑わなくても生きていけるようになる。

このようなコミュニティにおいては、コミュニティ全体でシステムが回るようになる。その一つの現われとしておすそ分け文化がある。

みんな割と地元のほうでは、高台移転いっても浜のほうなので、「これ取れたから、これ持ってって」とか、それはありますね。(L5)

漁で取れた魚や農作物は、余剰分を個人が保持するのではなく、コミュニティの成員に配分される。このような相互扶助によってコミュニティは維持される。

そういったコミュニティの一部になることによって、安心感を抱くことがある。

やっぱりその避難生活で家の人という安心感とか。やっぱり前は仕事を求めて一回東京とかに出たんですけど、それよりも家の人という安心感を感じて、実家の近くに仕事あれば家から通えるなと思ってて、(U3)

競争原理から距離をとって、コミュニティの相互

扶助に身を委ねることは、ある種、全人的な付き合いによる安心感がもたらされるのだろう。この安心感は、仕事を求めて都会に出ていった疲れた精神を癒やすものであったことは想像にかたくない。

これらの語り（「人を疑わない」「おすそ分け」「安心感」）は、南三陸町の田舎的なコミュニティの特徴を表しているように思われる。これらの語りをまとめて【濃密なコミュニティ】と名付けることとする。

3.4 公私混同

このような濃密なコミュニティは、ともすれば個人の自由が十分に与えられないことをも意味する。特に、都会的な生活に慣れている移住者になると、コミュニティの濃密さのネガティブな点も覚知されることとなる。

その語りの代表例がプライバシーが無いというものである。

プライバシーがない、一言で言うと。(I5)

仕事と生活の狭間がない。(I5)

ワークとライフはもうごちゃ混ぜです、割と。ほんとに、昨日一緒に仕事してた人は、今日は一緒に釣りしたりとか、何かそういう感じっすね (I2)

近所の親戚じゃない人が親戚みたいだし、距離感が近すぎるんですよ、なんか。噂も1日経ったら回ってるし、(I5)

私的な空間であるはずの家の中にもコミュニティは侵食する。仕事での人間関係と趣味での人間関係がほとんど同一である。そこに部分的な人間関係は想定されず、人間関係とはつねに全人的なものである。それらは、都会的な人間関係に慣れ親しんだ者にとっては親戚関係のようなものとして認識される。

全人的な人間関係は、仕事と私生活の垣根を極めて低くするため、私生活の中にも仕事あるいは地域の活動が組み込まれることとなる。その結果、田舎的なスローライフの暮らしはほとんど幻想となる。

地域って、何かすごいスローライフ的なイメー

ジあるかと思うんですけど、全然違うじゃないですか。めちゃ忙しいしみたい。東京より忙しいんじゃないかっていうぐらいの、やること多いしみたい、みんな仕事多いしみたい。(I2)

実際の田舎暮らしは多忙である。それは、都会の場合はコミュニティ維持がときおり管理会社などに外注されるのに対し、田舎の場合はそのようなコミュニティ維持に関する地道な活動（草刈りなど）も自分たちで行わなければならないからである。

以上の語り（「ワークとライフがごちゃ混ぜ」「多忙」）をまとめて、【公私混同】となづけることとする。これは、【濃密なコミュニティ】と表裏一体であり、どちらも全人的な人間関係を指向することに端を発するものである。

3.5 小括：共同体としての故郷

さて、上記の4つのグループ【アイデンティティの一部としての故郷】【くびきとしての故郷】【濃密なコミュニティ】【濃密なコミュニティ】は、共同体の特徴をよく捉えていると考えられる。前者2つのグループは、共同体が自らの選択よりも先に存在することを示しているし、後者2つのグループは、共同体の人間関係が全人的なものであることを示している。見田（2006）は、社会を2軸によって区分された4つの形式として捉えることを提案した。そのうちの「共同体」は、まさに意思以前のかつ人格的な関係を有するものとして定義される。

共同体を意思以前のかつ人格的な関係を有するものとして定義すると、その外部にさらに3つの社会を想定することができる。1つ目が、意思以前のかつ脱人格的な関係性を要件とする集列体である。これは、市場が例に挙げられる。2つ目が、意思的かつ脱人格的な関係性を要件とする連合体である。これは、会社が例に挙げられる。そして、最後に、意思的かつ人格的な関わりを要件とする交響体である（図1）。

さて、このような区分を認めた上で、いくつかの論点を示しておきたい。一つは、「故郷」の語りにおいて、共同体以外の性質を示す語りがあるかどうか。

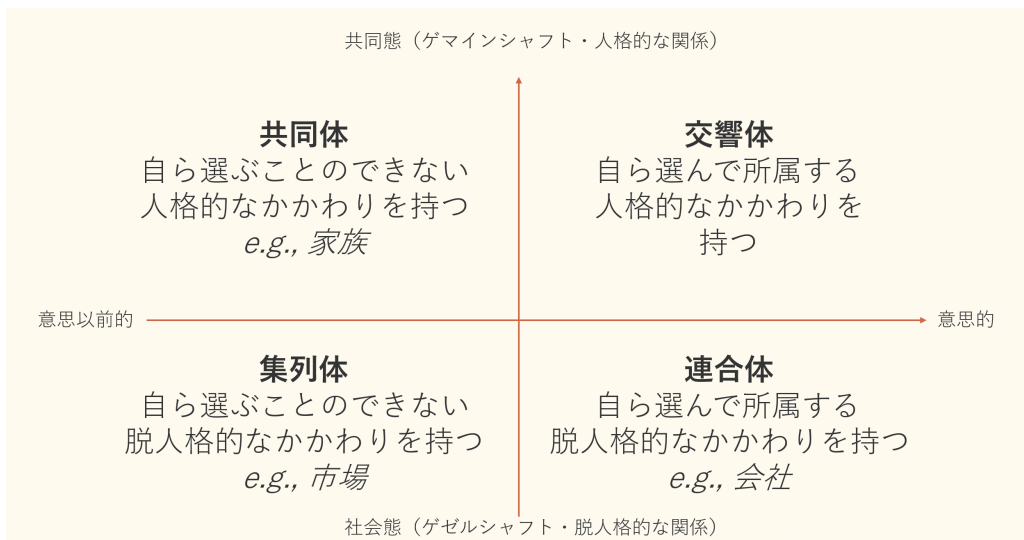


図1 社会の4つの形式(見田(2006)をもとに筆者作成)

もう一つは、それぞれの形式間の移動あるいは変容があるかどうか、それらについて具体的な語りをもとに分析を加えていく。

3.6 連合体としての故郷

連合体すなわち、意思的かつ脱人格的な関係性を南三陸町に重ねる語りは、Iターン者の語りに多く見られた。具体的には、「自己実現」「多くある選択肢の一つ」「趣味のつながり」としてまとめた。それぞれについて見ていこう。

まずは「自己実現」についての語りである。

ぼくが何かに貢献したいというか、震災の復興に貢献したいっていうよりかは、そこに自分が入った方が面白そうだなって思ったっていうのが一番ですね。(I3)

そこからもしよかったら、そういう事業づくりみたいな所の事務局と一緒にやらないかっていう話を持ちかけてもらって、こちらに移ること、(I6)

ここで語られるのは、自分がやりたいと思っていたことを実現するための場所がたまたま南三陸で

あったという語りである。いわば、目的を達成するための舞台として南三陸町を意思的に選択している。

移住という選択についても同様に、「多くある選択肢の一つ」として捉えていることが見て取れる。

移住を重いものと思ってなくて、軽い引っ越しぐらいだと僕は思っていた。(I2)

移住に関しても、別に何か職場が変わるぐらいみたいな。その場所がたまたま東北だったみたいな。東北に単身赴任とか、全然あるじゃないですか。そんな感じ？(I2)

元々転勤族だったので新しい土地に住むっていうこと自体には全く抵抗感はなく、(I6)

移住してきた人間・・・でも別に関わろうとも思わへんし。なんかあってもお前ら逃げれる場所あるやんって。(I1)

上2つの語りは、Iターン者の移住観を顕著に捉えている。上述してきたような居住地を「濃密なコミュニティ」であるとは考えておらず、転々と移り住むうちの一箇所であるというような軽やかさがある。また、上述してきたような、故郷からの逃れがたさとは相反するように、移住者は逃げられる＝別

の土地に容易に移り住めるということも特徴的である（この文脈では否定的に言及されているが）。

さらには、現地で人間関係の作り方もIターン者は軽やかである。

でも、それで友達ができたのは、フットサルに、地域でやってるフットサルに……（I2）

「趣味のつながり」から友達をつくる。それは、全人的な人間関係を志向してしまう共同体的な規範ではなく、趣味という限定的、脱人格的なつながりを重視する規範が表れていると考えられる。この規範はある種都市的なつながり方であるとも言え、それゆえ、移住者から語られる傾向にあった。

3.7 集列体としての故郷

意思以前のかつ脱人格的な関係性を要件とする集列体は、例として資本主義的な経済システムなどのことであり、少ないながらも南三陸と結びつける語りは見られた。ただし、これらの語りを分析する際には、本来は南三陸町の主産業である水産業をはじめとする一次産業や、近年就職者数が大幅に伸びている介護・福祉産業の産業構造を参照せねばならない。しかしながら、これらの考究は、本研究の求めているところ大幅に超え出てしまうため、本稿では、紹介する語りが、意思以前のかつ脱人格的な集列体を表すものであることを指摘するに留める。

企業側が割とクローズに囲い込むみたい。それを終身雇用とかっていう制度でがちがちにしてたんですけど、（I3）

東京の水準の給料とこっちの給料の水準。全然違うわけじゃないですか。それで同額もらうならその倍働け。それが嫌だったらやめなあかんでしょって。（I1）

濃密であるがゆえに公私混同が起こる集合体は、終身雇用というシステムによって補完される。また、給与も都会と比べると低く設定され、生活レベルを維持するためには、労働時間を増やさなければなら

ない。この労働システムは、労働者はもとより雇用主であっても最初から存在していたと感じられるものであり、システムを変更するという選択肢は存在しないという意味で、先述の軽やかに移動することが可能となる連合体とは異なる。

3.8 震災、そして交響体への移行

共同体規範や連合体規範は、震災という外的要因による環境変化によって、半ば強制的に変容した。まずは、連合体、すなわち意思的かつ脱人格的な集合体が、交響体すなわち、意思的かつ人格的な集合体に変容する過程が見られる語りを紹介しよう。その際に、適宜図1を参照してほしい。

連合体から交響体への移行は、意思的に南三陸を選択して居住した移住者が人格的な関係性を構築する過程に見られる。

一生住みたいな、そういう決断に関しては、多分、私も夫も、割と考え方、近いと思うんですけど、何かのタイミングが合って決断するというよりは、先に決断しちゃって、その決断が正解になるように動くみたい、そういう考え方で。（I4）

ここで重要なのは、共同体的な、濃密であるがゆえにプライベートも制限されるような、ときには面倒でさえある人間関係を志向しているという点である。そのような人間関係は、やりたいことが変わったからとか、他に魅力的な地域があるからといった理由で軽やかに離れることができない。それゆえ、移住者には相応の「決断」が必要となる。

続いて、共同体、すなわち意思以前のかつ人格的な集合体が、交響体すなわち、意思的かつ人格的な集合体に変容する過程が見られる語りを紹介しよう。

ここで紹介する語りは、とある南三陸町出身の若者の語りである。かれは、高校まで町内の公立校に通い、卒業後は専門学校に自宅から数時間かけて通っていた。その後、母親がパートで働いていたことのあるホテルに就職する。しかし、二年ほど働くも多忙のため、このまま働き続けるか悩み始める。そん

な折に起きたのが東日本大震災であった。

正直ホテルなので波が凄すぎて、忙しい時と暇な時と。夏場なんかも忙しくて。僕会計課にいたんですけど、会計でお金をもらう役目だったんですけど、朝五時とか、夏は間に合わないんで五時位に出勤、五時起きで出勤もうすぐ五分ぐらいなので、出勤して夜も十一時とかまで。なんかだんだんちょっとおかしくなってく自分があるな、みたいな。っていうのもありつつ、震災がちょうど、ちょうどというかやってきて、震災があって今辞めないとして、僕は辞めたいと思ってたんですけど、次も決まらないうちに嫌だなと思ってやめてなかったんですけど、結構同期も25人いたんですけど今何人残ってるかな、二人ぐらいですかね、二、三人かな、しか残ってない。三人か。三人くらい残って。結構僕よりも先にどんどんやめちゃったので、どんどん同期辞めるな、みたいな。先輩も、先輩は実際東京に行ったんですけど、先輩辞めるって言うから、じゃあ俺も辞めます、一緒に行きましょうみたいな感じで。

——それは震災の前ですか。

それ震災後ですね。次の日から避難者を受け入れるってなって。(L8)

東日本大震災を契機に仕事をやめて東京へ行こうとする。しかし、東京へ行く前に親戚から給水の仕事を頼まれ、臨時職員として町内を給水に周ることとなる。

僕結構好きだったのは、嫌だって言う人もいるんですけど、電車降りると結構潮の香りがしたんですよ、当時。それが嫌だって言う人もいるんですけど、僕は結構好きで。そういうのを思い浮かべた中で、僕この町で何もしてないなみたいな。何もしてないっていうか、恩返しというか、この町で何もしてないなっていうのを勝

手な思いがあって、やっぱりこの町いいなみたいな感じで。当時の風景とか。(L8)

あと漏水してると、たまに漏水してる箇所があって、そうすると電話が来て漏水してるんで行ってくださいみたいな。結構知ってる場所に行くと前の風景が結構浮かんできて、いい町だったよなあとかって思って。このまま出てくのやだなと思って。(L8)

震災なかったら多分辞めようとは思ってたと思うんですけど、辞めてなかったかなって思いますね、正直。(L8)

それまで意思以前の存在していた故郷であったが、震災後に再度故郷をめぐる、「やっぱりこの町いいな」と思いいたる。震災がなければホテルでの仕事は辞めていなかっただろうという述懐と合わせて考えると、震災によって南三陸町が大きく変貌し、また自身のライフプランも揺らぐ中、それまで自明のものとして存在していた故郷を自らの手で選択肢直したのではないだろうか。いわば、故郷を発見したのである。

4 総合考察：〈故郷〉の発見

このような故郷を発見したという語りをいくつかのステップを踏んで理解しよう。まずは、故郷と移住先の違いについて整理する。故郷は、自分の意思では選べない。端的に、生まれてくる場所は選べないからである。それに対し、移住先は自分の意思で選ぶことができる。語りの中にあった移住者がキャリアの選択肢の一つとして移住を考えているのは、まさにこの典型である。そして、自ら選ぶことのできない故郷は共同体的であり、選ぶことのできる移住先は連合体的である(図2)。

4.1 選択によって運命をつくる

しかしながら、前章で検討したのは、故郷—移住先という二項対立が止揚されて、交響体的な新たな

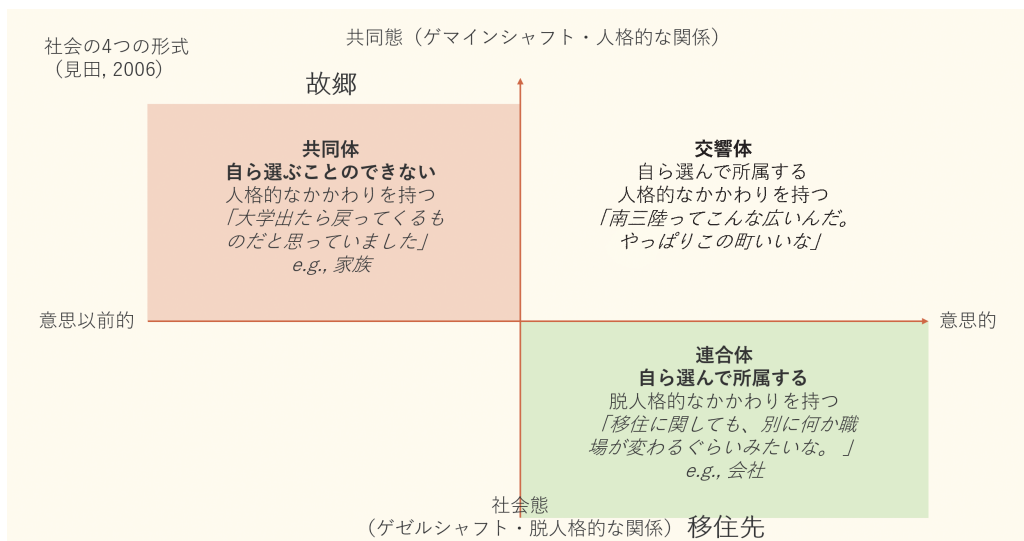


図2 故郷と移住先

価値観が生まれてくる過程であった。本章では、交響体的な故郷を、共同体的な故郷を区別するために、〈故郷〉と表記する。まずは、南三陸町が移住者にとって移住先から〈故郷〉へ変容する過程を見ていこう。移住者は最初は南三陸町を移住先、つまり数ある選択肢の一つと捉えていたわけだが、次第に南三陸で暮らすということを無条件で受け入れはじめる。

一生住みたいな、そういう決断に関しては、多分、私も夫も、割と考え方、近いと思うんですけど、何かのタイミングが合って決断するというよりは、先に決断しちゃって、その決断が正解になるように動くみたいな、そういう考え方で。(I4, 再掲)

このとき、数ある移住先の選択肢の一つであった南三陸町は、「先に決断しちゃ」うという語りからもわかるように、前提条件へと変化している。このような論理構成は、養子における親子関係の構築を例に取るとわかりやすいかもしれない。樂木(2005)は、養子縁組を支援するNPO「環の会」の事例をもとに、血縁なき親子関係においては先験性が重要で

あると論じる。

血縁を超えて親子関係を構築するためには、まずは、「血縁があってこそその親子」という前提を超え、たとえ血のつながりはなくとも、近い将来に出会う子どもが自分の子どもとして宿命づけられているという確信が、その出会いに先立って構成される必要がある。養子との出会いは、決して偶発的なものではなく、「縁」や「運命」に媒介された必然でなければならない。(p.23)

南三陸町への移住は、実際偶然に左右された部分が大きだろう。しかしながら、それでも自分が南三陸に移住したということが宿命的であるという確信がもたらされることが重要である。いわば、選択に先立つ縁や運命を選択することが、連合体的な移住先を交響体的な〈故郷〉に移行させる鍵であると考えられる。

そして、このような先験性によって生じるのは、南三陸に住むことの無条件性である。言い換えれば、「なぜ南三陸に移住したの?」という質問を無効にするような、理由なき選択である。もちろん実際に

はさまざまな条件比較の上で南三陸へ移住したわけであるが、南三陸がどんな場所であれ、私は無条件にそこに移住することに決めたという語りへの変容が起こることによって、選択的・脱人格的な人間関係は人格的な人間関係へと変容したのだろう。

4.2 選択の余地の無かったはずの故郷を選び直す

つづいて、地域在住者が故郷を〈故郷〉に変化していく過程を見ていく。故郷とは、選択の余地もなく最初から決まっているものである。しかし、震災を機に、南三陸に無条件に住み続けるという状況が揺らいだ。その結果、それでもなお南三陸に住み続けるという選択をする機会が突発的に生じた。そして、その結果、南三陸を自分の故郷とするべきところだと思えるようになったと思われる。

電車降りると結構潮の香りがしたんですよ、…
やっぱりこの町いいなみたいな (L8, 再掲)

先験的に選ばれていた故郷を、主体的に選び直す契機が震災によって生じた。それまでは、南三陸町にいても潮の香りは嗅いでいたとしても意識下にのぼらなかった。しかし、震災後改めて町を周ると潮

の香りに気づく。そして、やっぱりこの町いいなと思う。このとき、共同体的な故郷は、自分で選び取った〈故郷〉に変容する。震災は故郷の姿を変えてしまったけれど、そのことによって主体的に〈故郷〉を選び直す契機となったという側面もあるのではないか。

以上の議論をまとめたのが図3である。南三陸町を単なる移住先とみなしていた移住者は、その選択の先験性を十分に覚知することによって、無条件な関わり合いを基盤にした人格的な人間関係の端緒となる。また、南三陸町を故郷とみなしていた地元在住者は、震災を契機とした故郷を選び直す経験によって、意思的な選択の可能性がひらかれる。これらの経過をたどり、移住先や故郷は、意思的かつ人格的な関わりをもつ交響体的な〈故郷〉へと変容すると考えられる。

5 おわりに

本稿では、南三陸町の若者を中心にしたインタビュー調査の結果から、東日本大震災を契機に故郷観が変容したことを明らかにした。本研究の結果から派生すると思われるいくつかの問いを連ねることで本稿を閉じたい。

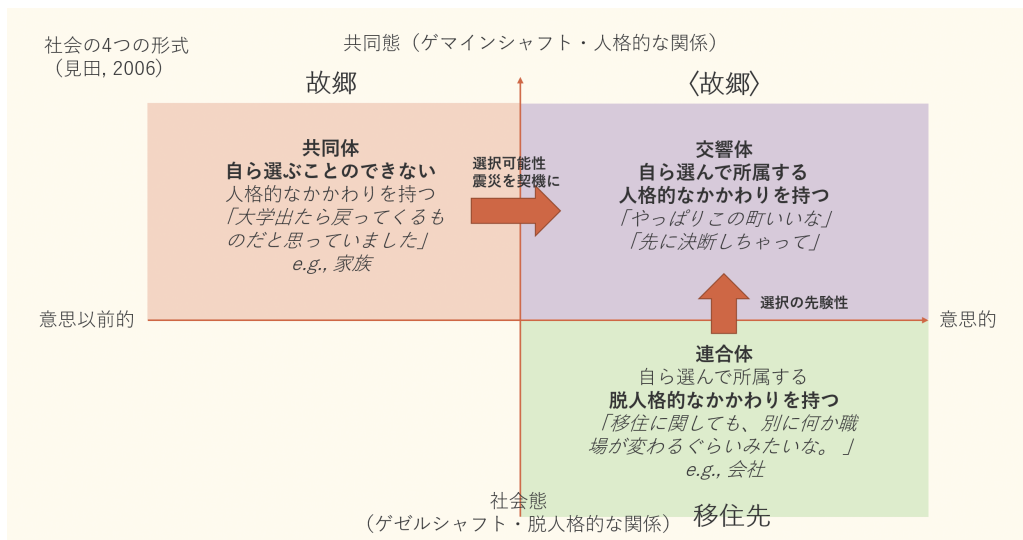


図3 〈故郷〉への移行

まず、今回の議論は被災地に限定されるべきかどうか、すなわち、被災していない過疎地でも同様の議論が可能ではないかという点である。本稿でも紹介した吉川（2019）のローカル・トラックス論は被災地に限定した議論ではないし、見田（2006）の交響体論にいたってはあらゆる社会に応用可能な射程範囲の広い議論である。私は本稿の議論は、他の多くの地域でも展開可能ではないかと考える。むしろ、日本の多くは、共同体規範が強いために硬直化しているのではないかと思われ、そういった強固な規範を変化させるラディカルな実践が求められるだろう。

次に、南三陸町の世代間のギャップを本稿では十分に議論することができなかった。南三陸町を通史として見る視点がなければ、今回の議論が震災でたまたま起きたものなのか、それとも歴史上繰り返されてきたものなのかは判別がつかない。特に、上の世代の語りには、かつてのデカセギや「丁稚奉公」のような都市との関係性も見ることがあり、さらなる分析が望まれる。

最後に、今回の分析とは逆ベクトル、つまり〈故郷〉から故郷、あるいは〈故郷〉から移住先への変容については十分に触れることができなかった。実際には、図3の中にある矢印は一方ではなく、双方向であるはずで、行ったりきたりしながら「まち」が形成されていくはずである。これを明らかにするには、さらなる継続的な調査が必要となるだろう。

【付記】

本研究は、JSPS科研費20H01650の助成を受け実施した。また、調査は上記科研の研究メンバー 8名で分担した。

参考文献

- 川喜田二郎、2017.『発想法 改版』中央公論新社。
吉川徹、2019.『新装版 学歴社会のローカル・トラックス—地方からの大学進学』大阪大学出版会。
鈴木勇・山本晃輔・岡邑衛・榎井緑・志水宏吉・高原耕平・宮前良平、2023.「東日本大震災被災地における若者のライフコース—条件困難地域で生活する理由とコミュニティの復興」

『未来共創』10: 3-41. https://www.hus.osaka-u.ac.jp/mirai-kyoso/ja/journal/mirai-kyoso-journal_10_02.pdf.

大門大朗・宮前良平・高原耕平、2020.「集合的トラウマと災害復興に関する理論的検討 —カイ・エリクソン『Everything in its Path』を読み返す—」『日本災害復興学会論文集』16: 37-46.

辻本昌弘、2024.「事例研究における事例の選択について」『実験社会心理学研究』早期公開. <https://doi.org/10.2130/jjesp.2402>.

見田宗介、2006.『社会学入門: 人間と社会の未来』岩波書店。

樂木章子、2005.「血縁なき親子関係をつくるネットワーク—NPO法人「環の会」の事例研究—」『実験社会心理学研究』44(1): 15-26. <https://doi.org/10.2130/jjesp.44.15>.

Erikson, K., 1976=2006. Everything in its Path: Destruction of Community in the Buffalo Creek Flood. Simon & Schuster.

（宮前良平・大門大朗・高原耕平訳、2021.『そこにすべてがあった バッファロー・クリーク洪水と集合的トラウマの社会学』夕書房。）

Transition of Narratives of 'Hometown' in the Affected Areaa —Based on interviews in the town of Minami Sanriku—

Ryohei MIYAMAE

Abstract

This study explores changes in the concept of 'hometown' in Minami Sanriku, an area affected by the Great East Japan Earthquake, through an interview-based survey. Despite the departure of many residents and the disintegration of some communities, new connections emerged between those who remained and newcomers. The study seeks to clarify how community norms evolved after the disaster and what 'home' means to those who lived through it. Interviews were conducted with individuals from diverse backgrounds, including locals, U-turners, and I-turners. The KJ method was used to analyse the narratives, revealing that 'hometown' was often perceived as a pre-determined community, intertwined with both identity and a sense of inescapable fate. However, in the post-disaster context, the community shifted from traditional communal bonds to a more dynamic, symphonic view of 'home,' where individuals actively re-selected their homeland. This study illustrates how perceptions of 'hometown' changed following the disaster and offers insights that may be applicable to other areas beyond those affected by disasters.

Keywords : Great East Japan Earthquake, community, 'home', symphonicity, relevant population

DOI : 10.15096 / UrbanManagement.1709